

東北地方のカリヤドという地名——中世の道と渡河——

青 山 宏 夫

第一章 本稿の目的

地名は、人々の認識に基づいてある場所が分節化され、その自然的特徴、社会的機能、歴史的経緯などに応じて、そこに与えられた呼称である。それゆえ地名はすぐれた歴史資料たりうる。しかし、多くの場合、地名とその意味する事象との関係を的確に把握することが困難なために、歴史研究において主たる資料として利用するには制約があった。地名がもつ多様なメッセージを十分に受けとめて、これを歴史研究の確実な資料とするためには、地名そのものの実証的な研究が欠かせない。

このような制約を回避する方法として、地理学の千葉徳爾は、地名の直接資料が乏しいことから他の資料などの援用、地名相互の比較、現地調査、事例の蓄積の必要性を指摘した^①。また、実際

の考察においては、地理学的関心に即して地名をセットでとらえてそれぞれの配置から地域誌を描き出すことに特徴があるが、その際に重視したのは、人と土地との関係を直接に表す小字またはそれより下位レベルの地名や通称地名などであった。

これに対して、日本中世史の服部英雄は小字や通称地名を収集し、とくに各地にみられる特定の地名について現地調査と文献資料なども用いて解釈し、歴史資料としての地名の意義を追究した^②。たとえば、ミソサクという地名が領主直営田の御正作を意味することを発見し、その土地条件から中世農村の実態をとらえようとしたが、これによって文献資料のみではなしえない歴史資料としての地名の可能性を再認識させることになった。

また、後に述べるように、本稿との関連では、タンガという地名の考察も注目される^③。タンガとは、僧侶をはじめとする行旅の



図1 カリヤドという地名等の分布

漢字で「仮宿」「借宿」「刈宿」「狩宿」などと表記される地名について、その読みに応じて「カリヤド」と「カリシユク」に区分した。

○：カリヤド系の地名 ●：カリシユク系の地名 ×：その他または読み方が不明の地名

人が一時的に滞在する、禪宗寺院などにあった旦過寮に由来する地名であるが、それが湊や渡し場などの交通の要衝や都市的な場^④にしばしばみられるという。中世の道や旅の多様な実態を探る資料がさがられるなかで、鈴木沙織が河川に近接した交通の要衝にあると指摘したマルコという地名と並んで、新たな歴史資料としての地名が追加されたものとみることができるといえる。

以上のように、地名を確かな歴史資料とする動きのなかで、地名の実証的研究を少しでも前進させて、歴史資料としての地名の足場を固めるためには、実証的な事例を一つ一つ蓄積していくことが、迂遠にみえるが確実な捷路となる。また、中世の道や旅に関する資料が求められているなかで、本稿で

表1 東北地方のカリヤドという地名等一覧

地名	よみ	所在地	立地		
			地形等	幹線道路	渡河点
苧宿	カリシュク	岩手県岩手町川口字苧宿	—	—	—
仮宿崎	カリヤドザキ	岩手県山田町仮宿崎	岬		
仮宿 大仮宿	カリヤド オオカリヤド	岩手県釜石市箱崎町字仮宿・字大仮宿	臨海		
仮宿	カリヤド	宮城県名取市愛島塩手字仮宿	岩沢川	奥大道	○
苧宿	カリヤド	福島県浪江町苧宿	請戸川	東海道	○
借宿	カリヤド	福島県二本松市借宿	阿武隈川、杉田川	東山道、奥大道	○
借宿	カリヤド	福島県鏡石町字東借宿・字西借宿	釈迦堂川、江花川	奥大道、牧本街道	○
借宿	カリヤド	福島県石川町形見字借宿	今出川、飛鳥川	御斎所街道	○
仮宿	カリヤド	福島県古殿町山上字仮宿	大平川	現在の国道349号	○
借宿	カリヤド	福島県白河市借宿	阿武隈川	東山道、奥大道	○

* 幹線道路については、原則として中世以前の主なものを記載した。ただし、推定を含む。渡河点欄の○印は渡河点であることを示す。岩手町の苧宿については、「カリシュク」と呼ぶことから、ひとまず検討から除外した。

は次に述べるように前稿^⑤を承けてカリヤドという地名をとりあげ
るが、その結果は中世の道や旅に関する多様な実態を探るための、
検証を踏まえた新たな歴史資料を提示することにもなる。

さて、前稿では、それまでほとんど議論されることのなかった
カリヤドという地名について、現地に即して検討し、それらの相
互比較を通じて帰納法的に論じること、その立地に関する特徴
と機能を探った^⑦。実際には、その手はじめとして関東地方の事例
を具体的に検討し、それ以外の地方については予察的な検討によ
って適宜事例を列挙した。ここでは、ひとまずの総括として、カ
リヤドという地名は、^⑧a 東海・関東甲信から東北南部にかけて主
として分布すること（図1）、^⑨b 河川に面すること、^⑩c 道とくに
中世の幹線道路と関連すること、^⑪d そのため渡河点に立地するも
のが多いことなどを指摘した。

具体的な検討では、五つの事例について次のように指摘した。
^⑫⑦ 神奈川県川崎市の苧宿は、多摩川最下流部において両岸の台地
がもっとも接近した地点にあつて、奥大道に接続する鎌倉街道中
道または下道の渡河点であつたこと、^⑬④ 埼玉県鳩山町の仮宿は、
越辺川に臨む段丘端にあつて、対岸の苦林宿（毛呂山町堂山下遺
跡）を通過して北上する鎌倉街道上道の渡河点であつたこと、^⑭⑤
東京都日の出町の狩宿は、平井川に突き出た舌状の段丘面上にあ

つて、秩父へ通じる鎌倉街道の渡河点であったこと、㊦群馬県伊勢崎市の仮宿は、旧広瀬川に臨む台地端にあつて、世良田長楽寺へ通じる道の渡河点であつたこと、㊧栃木県足利市の借宿は、新旧の渡良瀬川や清水川に面する地点にあつて、古代東山道およびそれに由来する幹線道路などの渡河点であつたことなどである。

本稿ではこれを承けて、カリヤドという地名の主な分布域の一つである東北地方を対象として、その検討事例を蓄積することを目的とする。いまその分布を概観すると、管見のかぎりでは、日本で唯一「カリシユク」と呼ばれる岩手県岩手町川口字菊宿のぞけば、表1のように九箇所にみられるが、いずれも太平洋側とくにその南部に分布している。そこで本稿では、福島県と宮城県のカリヤドという地名を具体的に検討することとする。その際、東北部の太平洋側には関東における鎌倉街道の延長である奥大道路が通っていることから、関東の事例で指摘した㊨の特徴と関わつて、奥大道路についても留意する。

- ① 千葉徳爾『新・地名の研究(新訂版)』古今書院、一九九四年。
- ② 服部英雄『景観にさぐる中世―変貌する村の姿と荘園史研究―』新人物往来社、一九九五年。
- ③ a 服部英雄『地名の歴史学』角川書店、二〇〇〇年、一二―一四六頁。b 同『峠の歴史学―古道をたずねて―』朝日新聞社、二〇〇七年、二三―二五二頁。

④ 次の文献は、且過は必ずしも禪宗寺院にかぎるものではないこと、都市の構成要素の一つであることを指摘する。榎原雅治『都市と一場の宗教性』(高埜利彦・安田次郎編『宗教社会史』山川出版社、二〇一二年)四二七―四五一頁。

⑤ 鈴木沙織『中世における交通と丸子―丸子地名の特性を探る―』(『青山史学』二六、二〇〇八年)一五―四〇頁。

⑥ 青山宏夫『地名「カリヤド」と渡河の景観―関東の事例から―』(金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館、二〇一八年)一〇四―一二八頁(以下、前稿とする)。

⑦ 前稿では、「カリヤド」と読む可能性のある地名すなわち漢字で「仮宿」「借宿」「菊宿」「狩宿」などと表記される地名をまずとりあげ、東日本では「カリヤド」、西日本では「カリシユク」と読まれることを確認したうえで、カリヤドという地名について検討した。本稿はそれを承けている。

第二章 東北地方の「カリヤド」の検討

第一節 宮城県名取市の仮宿

名取市愛島塩手(近世の塩手村)に小字仮宿がある。そこは、名取平野の西縁をかぎる高館丘陵から東へ突き出た三つの半島状の丘陵(北から北台丘陵、野田山丘陵、愛島丘陵とする)のうち、野田山丘陵と愛島丘陵がその付け根近くで合わさつた付近の北縁にあつて、岩沢川が形成する谷底平野をはさんで北台丘陵と向き合う位置にある(図2)。詳しくみると、仮宿は谷底平野に舌状



図2 名取仮宿の周辺

国土地理院の電子地形図25000を利用した。

に突き出た微高地上にあり、対岸の北台丘陵から南に突き出た部分と対峙して、谷底平野の狭隘部をなしている（図3）。
一方、仮宿の微高地から続く背後の丘頂部には、近世の塩手村と笠島村の境界が東西に走り、道祖神社（佐倍乃神社）が立地す

る。この神社には、長徳四（九九九）年、陸奥守として赴任した藤原実方が下馬しないまま社前を通行したために、神罰が下って落馬し落命したという伝説がある^①。後世この伝説は人口に膾炙し、文治二（一一八六）年には西行もこの地を訪れている^②。その伝説

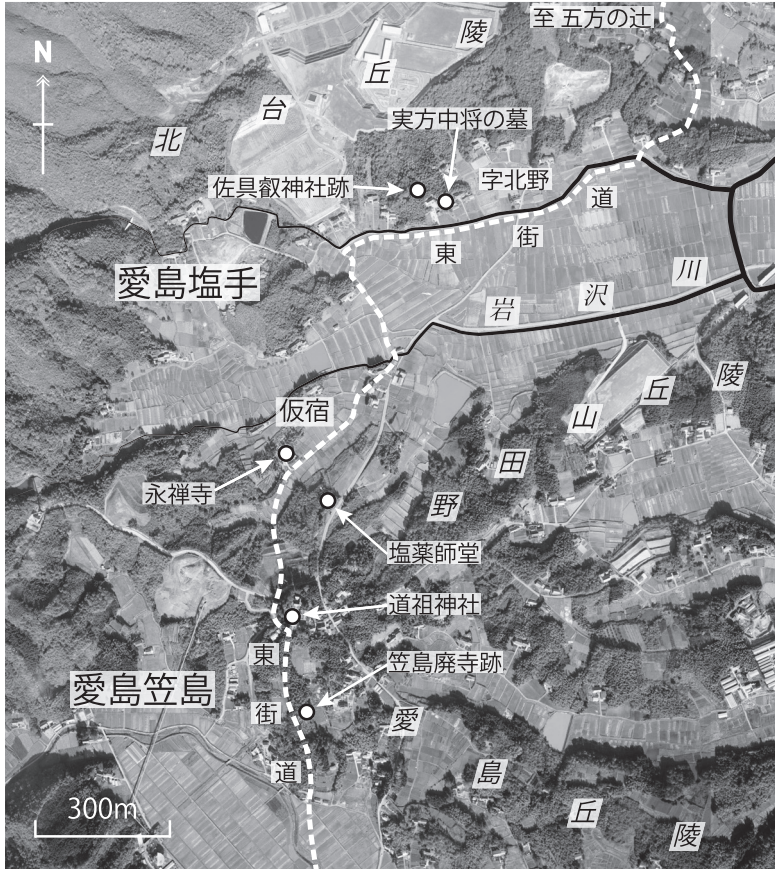


図3 名取飯宿とその付近

空中写真は1975年国土地理院撮影 (TO75-28-C18A-33.34)。

の真偽はともかく、ここで注目すべきことは、その社前を国守が行するという設定である。

道祖神社の表参道は、愛島丘陵南側の谷底平野から、愛島筥島（近世の筥島村）の小字東南沢と小字西台の境界をなす峰を北上し、神社正面の鳥居前に突き当たる。

この道は、地元では「あずまかいどう（東街道）」と称されて、古道と伝えられている。また、その途中には奈良・平安期の筥島廃寺跡がある。つまり、道祖神社前には重要な道が通過していたと考えられる。

伝承によれば、この「東街道」はさらに道祖神社の西裏をまわって飯宿の舌状微高地に下り、曹洞宗の永禪寺付近を通過したのち、岩沢川を渡って北台丘陵南縁の小

字北野に至るといふ。^③それから先は、北台丘陵南縁をしばらく東西に通過したのち、鞍部を抜けて北上したものと考えられる。

このルート上の北野地内には、式内社の佐具叡神社が、明治四一年の道祖神社への合祀まで立地し、^④その近くには実方の墓も伝えられている。また、仮宿には落馬した実方が養生した仮の宿があったために、^⑤あるいは薬師如来（塩薬師堂）の仮の宿があったために、^⑥その名が起こったという地名起源譚がある。

その後、「東街道」は、北台丘陵北端を下りて旧道を北上し、桑島長者伝説にちなむ永和二（一三七六）年銘をもつ幾世の墓と小佐治の墓が並んで建つあいだを通り抜けて増田川を渡り、五方（の辻と呼ばれる五差路に至る（図2））。そこは、平安末期には成立したとされる、東北地方における熊野信仰の中心であった名取熊野三社の一つ熊野那智神社の入口にあたり、一三世紀後半から一五世紀頃の宿坊跡と推定される川上遺跡がある。^⑩

旧道は、五方の辻から北へ数百メートルいった地点で東北に向きをかえ、仙台市と名取市の境界となっている小道に至るが、これが「東街道」と伝えられている。^⑪その沿道の高館吉田字乗馬には、名取郡地頭三浦氏の後裔と伝えられる家や三浦光村の子とされる駒王丸の墓（「こりんさま」ともいふ）がある。^⑫また、そこに隣接する仙台市太白区柳生には、三浦氏にまつわる伝承を有し、

熊野信仰の人々を集めて、建治三（一二七七）年から弘治二（一五五六）年まで十数基の板碑を残した延命寺があった。^⑭

さらにこれを進むと、現在では一部で途切れてしまっているが、明治八（一八七五）年の『吉田村全図』^⑮や『柳生村縮図』^⑯で確認できる道を通って、柳生字上河原で名取川南岸に至る。そこに「相の瀬渡し」があった。^⑰この渡しには、奥州合戦の折に名取川を渡ろうとした源頼朝の馬が進もうとしなかったが、上流にある名取熊野社への祈願により渡河することができたという伝説がある。^⑱このルートが頼朝や鎌倉と関係することを想起させる点や、熊野信仰と渡河との関係を示唆する点は興味深い。後者に関しては、後述の白河借宿においても言及する。

相の瀬で名取川を越えると仙台市太白区大野田である。周知のようにそこには王ノ壇遺跡があり、奥大道と推定される道路跡が出土している。それは、両側に側溝をもつ幅四メートル前後の一三世紀後半から一四世紀前半の舗装道路であり、長さは三七〇メートルにおよぶ。^⑳真北から東へ約四十五度傾いた方向の部分と六十度近く傾いた方向の部分などが接続した屈曲部をもちつつも、全体としては東北―西南の方向に走っている。それを西南方にたどると相の瀬に至り、名取川南岸の「東街道」に接続する。

この名取川南岸の「東街道」は、真北から東へ約五十度の傾き

をもつて走っているの、鳥瞰的には、王ノ壇遺跡の道路跡の方向と一致しているとみてよい。とすれば、相の瀬で接続する名取川兩岸の二本の道は、高館丘陵の東北端から名取平野を横断する一本の連続する幹線道路であったと考えられる。

以上のように、名取仮宿にはかつての幹線道路おそらく奥大道が通過していた可能性が高い。そこはまた、北台丘陵と野田山・愛鳥丘陵とのあいだを流れる岩沢川に向かって舌状に突き出た微高地であり、小流とはいえ渡河に適した地点であった。

第二節 福島県白河市の借宿

白河市借宿は阿武隈川右岸にあって、幅約一キロメートルの谷底平野に南から張り出した河岸段丘の北東端に位置する。しかし、その南と西には小谷が入り込んでいるため、そこは阿武隈川に舌状に突き出たような形態を呈する。そのため、阿武隈川にもっとも接近した安定的な平坦地となっている(図4)。

文化二(一八〇五)年に完成した白河藩の地誌『白河風土記』によると、この借宿には、貴人が逗留したことからその名が起ったという地名起源譚や、現集落の東部にあたる小字白幡に前九年合戦の折に源義家が陣を張ったという伝説がある。また、約五〇〇メートル東方の新地山は『八雲御抄』²⁴⁾に歌枕として載る「人

忘れずの山」とされ、山頂には源義経の家臣である佐藤繼信・忠信兄弟の母がその供養のために勧請したと伝えられる羽黒神社がある。一方、阿武隈川をはさんでそれと対峙するのが「人懐かしの山」と詠われた木ノ内山であり、その南東麓にも佐藤兄弟を供養した阿弥陀堂があったと伝えられる。しかもこれら二つの山には、弁慶がそのあいだで阿武隈川をせき止めようとした、あるいはかつては地続きであったと語る伝説もある。このように、兩岸を関連付ける伝説があるのもこの付近の特徴である。

さらに、『白河風土記』は、借宿に多数の古瓦片が堆積した塚があり、周囲に十個ほどの柱礎石があると記す。いまこれを借宿廢寺跡といい、七世紀末頃の創建と推定される法隆寺式伽藍配置の寺院跡であるとされている。²⁴⁾そこから採集された軒丸瓦は、阿武隈川対岸の関和久官衙遺跡(泉崎村)の出土瓦と共通し、ともに大岡窯跡(白河市表郷大岡)などで焼成されたという。²⁵⁾

関和久官衙遺跡は、阿武隈川左岸の木ノ内山南東麓に位置し、七世紀末から一〇世紀後半の白河郡衙跡と推定されている。²⁶⁾そのうち、中宿・古寺地区は山麓の微高地上にあって、門を有する柱列で区画された多数の建物からなり、郡名を示す「白」や「駅家」などの墨書土器が出土することから、郡庁院、館院、厩院などの官衙ブロックと考えられている。一方、明地地区はそれより

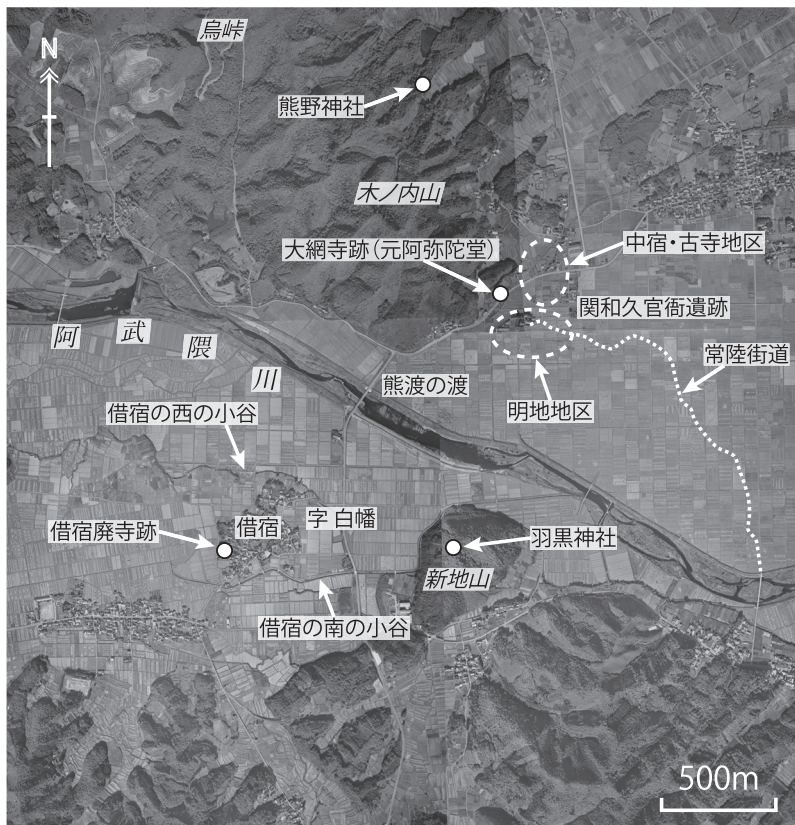


図4 白河借宿とその付近

空中写真は1975年国土地理院撮影（TO75-33-C4B-23、25およびTO75-33-C5B-21、23）。

阿武隈川に近い低地に位置し、溝で区画されたなかに整然と並ぶ多数の大きな建物からなることから、正倉院と推定されている。

正倉院を区画する溝のうち、北辺のそれは阿武隈川に合流する小河川に接続しているため、運河の機能を果たしたと考えられている。また、関和久官衙遺跡から東南方へ向かう「常陸街道」という古道があることから、ここから常陸に至る道が通じていたと想定することができる。このように考えると、関和久官衙遺跡すなわち白河郡衙とは、水陸交通の結節点であったことになる。

一方、それが白河郡衙であるとすれば、「駅家」の墨書土器が出土していることからみても、古代東山道もまたそこを通過していたと考えられる。とすれば、そこから「白河関」方面に至るにはどこかで阿武隈川を渡らなければならない。借



図5 白河借宿の周辺

国土地理院の電子地形図25000を利用した。

宿と関和久官衙遺跡の距離は阿武隈川をはさんで約一キロメートルであり、前述のような地形条件のもとにあって渡河に適している。しかも、借宿には、白河郡衙と瓦を共通にして互いに関連するとみられる同時代の借宿廃寺が立地し、幹線道路が通過していたとみても無理はない。とすれば、古代東山道は借宿と関和久官衙遺跡のあいだで阿武隈川を渡っていた可能性が高い。

時代を下ると、関和久官衙遺跡の隣接地（泉崎村北平山古寺）には、本願寺第二世の如信が奥州において真宗布教の拠点とした大綱寺があり、前述の佐藤兄弟を供養した阿弥陀堂を前身とするものであったと伝えられ、実際にも鎌倉期の中国銭や火葬墓が出土している²⁸。この付近が、中世以降においても人々の行き交い集まる場所であったと考えても無理はない。また、次に

述べるように、ここには中世以前にさかのぼりうる阿武隈川の渡河伝説があることも特徴である。このように、この付近において、古代に通じていた幹線道路がある程度その後も存続していたとすれば、それは奥大道の可能性が高い。

では、その渡河伝説とは何か。それは、木ノ内山に連なる鳥峠という山塊の東麓にある熊野神社に関わる。すなわち、前九年合戦の折、源義家はこの付近で阿武隈川を渡るのに難儀していたが、どこからともなく現れて泳いで渡った熊をみて、それをまねすることですぐに渡河することができたため、義家はそれを熊野の神徳によるとして治暦年間に当社を建立したという²⁹。地元でもこの付近を「熊渡の渡」と呼ぶ³⁰。このような伝説は、第一にこの付近が阿武隈川の渡河点であること、第二に、前述の名取川の場合と同様に、その渡河に熊野信仰が関わっていることを示唆している点で意義深い。

さて、借宿を古代東山道や奥大道などの幹線道路が通っていたとすれば、それより南または西、あるいは北または東へのルートは想定できるだろうか。これについて簡単に触れておこう。

南または西については、借宿より南西に約八キロメートル離れた芳野遺跡（白河市白坂芳野）³¹が手がかりになる（図5）。そこでは一三世紀から一四世紀の東西方向に走る幅約五メートルの道

路跡が出土し、奥大道と推定されている。その位置は、白坂越えの陸奥・下野国境から三キロメートル余り北上した皮籠付近であることから、当時の奥大道は白坂越えで北上し、皮籠付近で東折して芳野遺跡を東西に通過していたことになる。皮籠は中世には「皮子辻」とも称された交通の要衝であり、³²金売り吉次に因む地名起源譚や、吉次兄弟の墓、彼らを義経が祀ったという八幡神社など、金売り吉次に関する伝説が多い³³。

芳野遺跡より東については、従来の説は、中世後期にはそこから東に向かい、十文字付近で北上して土武塚を通り、白川城（搦目城）西麓をまわって阿武隈川右岸に至ったとする³⁴。しかし、中世前期については、これまで言及がなかったが、借宿や関和久官衙遺跡周辺における交通路上の意義に注目するならば、芳野遺跡の道路跡の方向に沿ってそのまま谷筋を東に向かい、源義家の通行伝説のある魂消坂（玉坂ともいう）³⁵を下って双石で阿武隈川右岸に至り、そこからさらに東進して借宿へ向かうコースが浮上する。それは、芳野遺跡から借宿までほぼ直線で到達し、しかも谷中を通るために魂消坂をのぞけばほとんど平坦な道である³⁶。

一方、関和久官衙遺跡より北または東については、さほど有力な手がかりはない。しかし、前述の「熊渡の渡」の伝説をもつ熊野神社が鳥峠東麓にあり、その北方には「大家」の墨書土器が出

土し関和久官衙遺跡と関連するとみられる平安期の集落跡（同村上礼堂遺跡）がある点などを考慮するならば、関和久官衙遺跡から烏峠東麓を北上して阿武隈川有数の支流である釈迦堂川右岸に至ったと考えられる。

以上のように、白河借宿には古代東山道や奥大道のような幹線道路が通過していた。しかも、阿武隈川に向かって舌状に突き出た段丘上に位置し、河川近くまで安定した道を確保できるため、渡河に有利な位置にあったということが出来る。

第三節 福島県鏡石町の借宿

鏡石町に東借宿と西借宿という小字がある（以下、鏡石町に関して借宿という場合は両者をさす）。そこは、釈迦堂川と江花川の合流点にあり、現在では釈迦堂川左岸に位置する。しかし、釈迦堂川は、一九七〇年代前半の直線化工事以前には、借宿付近で東から舌状に突き出た段丘にさえぎられて西に曲流していた。つまり、借宿は曲流する釈迦堂川の右岸に位置していた（図6）。

借宿の段丘手前で曲流した釈迦堂川は、空中写真からもわかるように屈曲部内側の滑走斜面では浸水しやすく、そのため川幅は広いが比較的浅瀬で流れも緩やかであった。このような自然条件にあったために渡河点として利用され、須賀川から牧本村に至る

牧本街道が借宿で釈迦堂川を渡っていたという。事実、借宿で渡河するその道が明治期の地籍図でも確認できる。

牧本村は、明治二二年に牧之内村が上松本村・下松本村と合併して成立した村である。そのうち牧之内村は、白河から会津に至る白河街道の宿駅であり、戦国期にその名がみえる。つまり、鏡石借宿で釈迦堂川を越える道は、須賀川のある中通りから牧之内経由で会津にも抜けうる幹線道路であった。このように、鏡石借宿は、河川に突き出た段丘ないしそれ続く微高地にあつて、幹線道路が通過し、その渡河点にあつていった。

ところで、古代東山道や奥大道に関して注目すべき道路跡が、須賀川市のすぐ北、阿武隈川左岸の笹原川合流点近くにある荒井猫田遺跡（郡山市南）で発見されている（図7）。それは、一二世紀後半から一四世紀中頃までの町をともしつつ、屈曲部をもちながらもほぼ直線状に、おおむね北北東から南南西にかけて約三〇〇メートルにわたつて走る路面幅五メートル前後の道路跡であり、奥大道と推定されている。また、その約二〇〇メートル西では、ほぼ並行して走る古代東山道も出土している。つまり、荒井猫田遺跡には、古代や中世の幹線道路が南北に通過していたこととなる。

時代は下るが、その道路跡の方向に約二キロメートル南に向か



図6 鏡石借宿とその付近

空中写真は1972年国土地理院撮影（TO729Y-C3-13）。

うと、阿武隈川左岸の自然堤防上に位置する篠川御所跡（同市安積町笹川）に至る。篠川御所とは、稲村御所（須賀川市稲）とともに応永六（一三九九）年に鎌倉府が設置した機関で、南部にかざられるといえ奥羽支配の拠点であった^{④③}。これらの立地は交通条件によるところが大きいといわれており、篠川御所は、南北に走る奥大道と会津・越後へ至る道との結節点であり、また釈迦堂川左岸にある稲村御所も、同様に南北に走る奥大道と太平洋側に至る道との結節点にあつたとい^{④④}たという。しかしそれにとどまらず、稲村御所につい

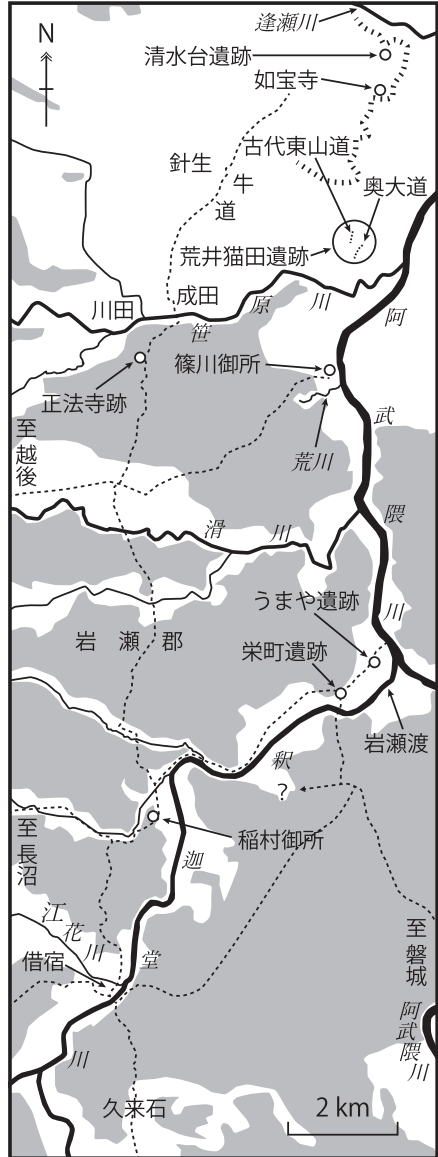


図7 鏡石借宿の周辺

国土地理院の電子地形図25000を利用した。

ては、そこから西に向かう道が、前述した白河街道に長沼で接続し、会津を経由して日本海側へも通じていた。つまり、そこは日本列島横断ルートの結節点であった。

一方、天保二二（一八四一）年に完成した二本松藩の地誌『相生集』によれば、郡山の如宝寺（安積郡銜比定地の清水台遺跡に至近）から、針生、川田、成田などを経て岩瀬郡に至る道があり、その道は虎丸長者伝説と関わって如宝寺観音堂修造料の木材を牛で運んだことから「牛道」と呼ばれ、その両側は掘り上げられた形態をしているという^{④5}。現在でもそのコースはおおむねたどるこ

とができるが、その先は岩瀬郡内の稲村御所に続く。栃木県下野市の下古館遺跡の中央を貫通し奥大道（鎌倉街道）と推定されている道が、地元で「うしみち」と呼ばれてきたことに注意するならば、『相生集』の牛道も、その名称と構造からみて近世以前にさかのぼる幹線道路の可能性^{④7}がある。この点で注目すべきは、前述の篠川御所から会津・越後へ至る道がこの牛道と交差し、それによって両御所が道で直接結ばれていたことである。

両御所がこのような交通条件によって立地していたとすれば、これらの道路網は遅くとも一四世紀末までには成立していたとみ

なければならぬ⁴⁸。つまり、一四世紀末以前に奥大道あるいは奥州を南北に縦貫する幹線道路が、荒井猫田遺跡から篠川御所を経由し、部分的には阿武隈川や釈迦堂川沿岸から離れつつも、稲村御所に向かっていたと考えられる。ただし、古代の磐瀬郡衙（須賀川市栄町遺跡）や磐瀬駅（同市うまや遺跡か）が、釈迦堂川左岸の阿武隈川合流点近くに推定されていることや、その付近に釈迦堂川の「岩瀬渡」があったと伝えられることから、古代東山道はより阿武隈川沿岸近くを通過していた可能性がある。

さて、前節では、古代東山道や奥大道とみられる幹線道路が、関和久官衙遺跡から北上して釈迦堂川右岸に至ることを指摘した。一方、これまでの検討から、時代は下がるものの、荒井猫田遺跡から篠川御所を経て稲村御所に至る幹線道路が、釈迦堂川左岸を南下することがわかった。もし両者が接続するとすれば、稲村御所以南のどこかで釈迦堂川を渡らなければならない。

鏡石借宿は、稲村御所から台地上を南南西に約三キロメートル進んだところにあり、そこで釈迦堂川を渡れば、小字西借宿で前述の牧本街道と交差し、東隣の小字桜岡の段丘上を通って久来石付近に至る古道に接続する（図6）。この道は明治期の地籍図でも確認できる。その沿線には、高月左大弁なる者の霊を祀ると伝えられる高月大明神社や和田義盛の甥平太胤長の墓碑と伝えられ

る平太の碑がある。久来石からは、まっすぐに南下すれば四キロメートル前後で矢吹町に至り、関和久から北上してきたルートとその付近で出会う可能性が高い。

以上のように、鏡石借宿は、中通りと会津を結ぶ東西の幹線道路に加えて、南北に縦貫する中世奥州の大動脈ともいえる道が通っていた可能性が高い。そこは、釈迦堂川に舌状に突き出た段丘やそれに続く微高地上にあり、渡河の自然条件を備えていた。

第四節 福島県二本松市の借宿

二本松市の借宿は、阿武隈川に合流する杉田川右岸にある。地形的には、杉田川の低地に臨む丘陵北縁に位置し、その対岸の丘陵が南に突き出ている地点と向き合う位置にある。そのため、両岸の丘陵のあいだは幅三〇〇メートル余りであり、杉田川の形成する低地はこの付近でもっとも狭くなっている（図8）。

杉田川右岸を詳しくみると、借宿の西は丘陵を刻む大沢でかきられるが、それを越えるとさらに西側に末端に平坦部を有する丘陵が続く。その大沢に近い丘陵末端附近が小字長者宮である。ここには虎丸長者伝説があり、前述した郡山のそれと一連をなす物語として古くから語られ、また焼米が出土することで近世から有名であった⁵¹。その伝説によれば、後三年合戦の折、源義家が長

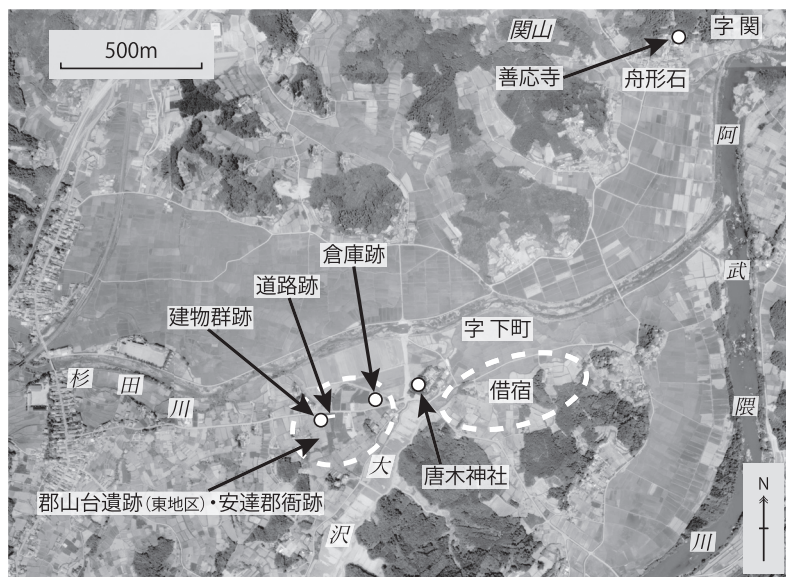


図8 二本松借宿とその付近

空中写真は1975年国土地理院撮影 (TO75-7-C11B-3, 4および TO75-7-C12B-9, 10)。

者に一夜の宿を乞うたが断られたため、付近で野宿を余儀なくされ、義家はついに長者の家を焼き払ってしまった、その際に野宿した地が「カリヤド」と呼ばれるようになったという。⁵²⁾ 焼米の出土とカリヤドという地名がモチーフになっている。

実際、長者宮では大量の焼米と倉庫とみられる大型建物跡が出土している。また、そのすぐ西の小字郡山台では、八世紀中頃から一〇世紀後半の多数の建物跡が出土している。これらは郡山台遺跡（東地区）と呼ばれ、前身となった九世紀までの建物をともしないつつも、多くは企画性のある一〇世紀以降の建物群であることから、延喜六（九〇六）年に設置された安達郡衙跡であると考えられている。このうち、丘陵末端にあつて杉田川や大沢に近い長者宮は水運にも好立地であるため、出土した遺構・遺物からみて、正倉院跡であると考えられている。⁵⁴⁾

郡山台遺跡（東地区）が安達郡衙跡であるとすれば、一〇世紀初頭の郡衙であつたとしても、幹線道路が通過していたと考えなければならぬ。この点で注目すべきは、郡山台において、幅二・四メートルの溝で区切られた建物跡を起点として東にのびる一〇世紀から一一世紀の道路跡が、両側に側溝をもたない簡易な構造ながら、幅四メートル前後でほぼ直線状に三十メートル以上にわたって発見されていることである。⁵⁵⁾

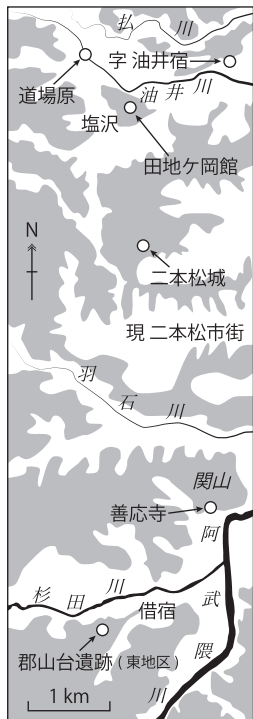


図9 二本松借宿の周辺

国土地理院の電子地形図25000を利用した。

それは杉田川を渡らなければならない。とすれば、その渡河点とはその自然条件を備えた二本松借宿付近であった可能性が高い。

そこを古道が通り、渡河点があったとする想定を支持する伝承が現地に残っている。二本松借宿の地先にあつて渡河点と想定される付近は、近世の北杉田村字下町にあたるが、『相生集』によれば、「北杉田村関山のあたり下町と字す

この道路跡との具体的な関係は必ずしも明確ではないが、この付近の古代東山道については、杉田川南岸の丘陵端を東西走し、安達郡衙推定地の小字郡山台を経て、小字長者宮にある唐木神社付近に至り、そこで杉田川を渡ったとする説がある⁵⁸⁾。唐木神社とは、道路跡を東へ延長した方向にある丘陵先端の小丘にあつて、安達郡の前身とされる安積郡安達郷などを開発し、安達連の姓を賜った渡来系の狛造子押麻呂の一族に関連するとされる神社であり、その直下にある大沢をはさんで借宿に隣接する。地形的にみると郡山台から借宿まで大沢以外は台地上を通過し、一キロメートル未満の距離にある。長者宮付近における水運の立地条件とも関わつて、ここに幹線道路が通過していたとしても、強ち無理な想定ではあるまい。

ところで、これより北で古代東山道や奥大道が通過していたと

推定されているのは、田地ヶ岡館（二本松市塩沢町）である（図9）。伝承によれば、そこは「国司ヶ館」とも呼ばれ、その西北にある「どじょうはら」すなわち道場原と呼ばれる地は時宗称念寺の跡地であり、また南北朝期には奥州探題の畠山氏が拠つた地でもあるという⁶⁰⁾。古代から中世にかけて、政治的拠点であり交通の要衝でもあつたことをうかがわせる。また、塩沢の東に接する油井には小字油井宿などがあり、田地ヶ岡館を含めてこの付近は古代東山道の湯日駅に比定されている。

この田地ヶ岡館は、阿武隈川左岸に注ぐ油井川右岸に位置し、二本松借宿からは北に約六キロメートルの地点にある。そのあいだに阿武隈川を渡らなければならない地点はない。もし郡山台遺跡（東地区）から田地ヶ岡館付近に向かう道があつたとすれば、

る処より舟形石在まで古への往来にもありしならん」という。⁶⁴また、その北側の山は地元では「関山」と呼ばれ、関址と考えられている。⁶⁵この山の裾野をその古道に沿って北に進んで舟形石の集落に至ると、慈覚大師の開基と伝えられ、前九年合戦の折に源頼家・義家が戦勝祈願したという伝説のほか、源義経の家臣である常陸坊海尊が一時滞在したという伝説のある船形山薬王院善応寺がある。⁶⁶

以上のように、二本松借宿は、安達郡衙跡に隣接して水陸交通の結節点に近く、古代から中世の幹線道路の渡河点であった可能性が高い。地形的にみると、杉田川に面して、対岸の丘陵とともに谷底平野の狭隘部を形成しているため、渡河に適した自然条件を備えている。

- ① 『源平盛衰記』巻第七「笠馬道祖神事」。
- ② 『山家集』巻中。
- ③ 名取市史編纂委員会編『名取市史』名取市、一九七七年、一三三頁・八八七頁。
- ④ 『愛嶋村全図』（宮城県公文書館所蔵、配架番号V-二七五）。
- ⑤ 前掲③（八八七頁）では、実方の落馬地点を佐具穀神社の前とする。
- ⑥ 『封内風土記』巻之五「塩手邑」。
- ⑦ 氏家重男『なとりの伝説と造物』3「名取市郷土史研究会・NPO 法人ふれあい、二〇〇四年、四二―四三頁。
- ⑧ 松本源吉『陸前名取郡の古碑』（『考古学』八一―二、一九三七年）七

六一―〇五頁。

- ⑨ 熊野那智神社からは平安後期から鎌倉期の懸仏や鏡が多数発見されている。前掲③（二〇九―二二三頁）。
- ⑩ 名取市教育委員会編『川上遺跡―中世における名取熊野那智神社門前宿跡調査―』名取市教育委員会、一九九〇年。
- ⑪ 仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編二 古代中世』仙台市、二〇〇〇年、二四二頁。
- ⑫ 伊藤 信「名取市新宮寺一切経の歴史的背景」（東北歴史資料館編『名取新宮寺一切経調査報告書』東北歴史資料館振興会、一九八〇年）四七―四八九頁。
- ⑬ 名取市教育委員会編『名取市金石史料Ⅰ（板碑編）』名取市教育委員会、一九八八年、一〇一番。ただし、同書では所在地の地番に誤りがある。
- ⑭ 佐藤正人「道々に建つ板碑」（人間田宣夫監修 菊池勇夫・齋藤善之編『講座東北の歴史 第四巻 交流と環境』清文堂、二〇一二年）四一―六九頁。
- ⑮ 宮城県公文書館所蔵。配架番号V-一三五。
- ⑯ 宮城県公文書館所蔵。配架番号V-一二〇。
- ⑰ 木村孝文『太白の散歩手帖―郡山から二口までの史跡を訪ねて―』宝文堂、二〇〇一年、九五頁。
- ⑱ 小川淳一・高橋綾子編『王ノ壇遺跡』仙台市教育委員会、二〇〇〇年、二〇頁。
- ⑲ 前掲第一章⑥。
- ⑳ 前掲⑱（二二頁・四六〇頁）。
- ㉑ 『白河風土記』巻八「借宿村」。
- ㉒ 『八雲御抄』巻第五。
- ㉓ 白河市編『白河市史 第九巻 各論編1 民俗』白河市、一九九〇

- 年、六二一―六一三頁。
- ②4 鈴木 功『白河郡衙遺跡群』同成社、二〇〇六年、一二五―一三八頁。
- ②5 前掲②4（五八―一六四頁）。
- ②6 前掲②4（二八―一四七頁）。
- ②7 鈴木 啓「遺跡の現況」（福島県教育委員会編『関和久遺跡』（福島県教育委員会、一九八五年）四―九頁。この道は、明治四二年の五分の一の地形図「棚倉」で確認できる。
- ②8 泉崎村教育委員会編『泉崎の文化財』泉崎村教育委員会、一九九三年、一五頁。
- ②9 西白河郡役所編『西白河郡誌』西白河郡役所、一九一五年、二五八頁。
- ③0 岩越二郎「西白河郡烏峠附近の遺跡遺物に就いて（下）」（『岩磐史談』一一九、一九三六年）三四三―三四九頁。
- ③1 鈴木一寿「奥大道吉野宿―福島県白河市芳野遺跡の調査―」（藤原良章・飯村 均編『中世の宿と町』高志書院、二〇〇七年）九一―一〇六頁。
- ③2 前掲③1。
- ③3 『白河風土記』巻之三「皮籠村」。
- ③4 a 安田初雄「所謂奥六郡絵図とその歴史地理学的意義」（『福島大学教育学部論集社会科学部部門』四三、一九九八年）二一―三六頁。b 佐川庄司「白河城下と奥州街道の整備」（『白河市編』『白河市史 第二巻 通史編2 近世』白河市、二〇〇六年）六七―七八頁。
- ③5 『白河風土記』巻之八「双石村」。
- ③6 白河関を旗宿に想定した場合は、そこから谷に沿って北上し、関山東麓をまわって郷渡に至り、関和久官衙遺跡や借宿廃寺跡で出土した瓦を生産した窯跡のある大岡付近で小丘を越えて板橋に出て、阿武隈
- 川右岸を借宿に向かうコースが考えられる。おそらくこれが古代東山道であった可能性が高い。
- ③7 鏡石町教育委員会編『鏡石の民話』鏡石町・鏡石町教育委員会、一九九〇年、九一―九二頁。
- ③8 福島県歴史資料館所蔵の、明治一五年以前の小字図『岩代国岩瀬郡鏡田村字七曲り』、同『字境』（以上、整理番号2）、明治一六年以前の小字図『岩代国岩瀬郡久来石村字東借宿』、同『字西借宿』（以上、整理番号 岩瀬4）、明治一九年以前の小字図『岩代国岩瀬郡保土原村字堤塘根』（整理番号30）など。
- ③9 天正八（一五八〇）年六月の青竜寺棟札に「奥州岩瀬郡牧之内村太永山聖竜寺造立」とみえる。福島県編『福島県史 第七巻 資料編2 古代・中世資料』福島県、一九六六年、一〇二―四頁。
- ④0 高橋博志「鎌倉時代の奥大道と町跡―荒井猫田遺跡の調査1―」（藤原良章・飯村 均編『中世の宿と町』高志書院、二〇〇七年）七―三九頁。
- ④1 押山雄三「中世後期の館と『北の町』―荒井猫田遺跡の発掘調査2―」（藤原良章・飯村 均編『中世の宿と町』高志書院、二〇〇七年）四〇―五四頁。
- ④2 垣内和孝「篠川御所と篠川館」（藤原良章・飯村 均編『中世の宿と町』高志書院、二〇〇七年）五五―七〇頁。
- ④3 柳原敏昭「中世陸奥国の地域区分」（柳原敏昭・飯村 均編『鎌倉・室町時代の奥州』高志書院、二〇〇二年）三―二四頁。
- ④4 黒嶋 敏「奥州探題考―中世国家と陸奥国―」（『日本歴史』六三三、二〇〇〇年）一一―一七頁。
- ④5 『相生集』巻之第七稿「郡山」（翻刻 二本松市編『相生集 上』二本松市、二〇〇五年）。なお、郡山市教育委員会社会教育課編『郡山の伝説』（郡山市教育委員会、一九八六年）によれば、旧川田村地内

の正法寺跡（小字牛ノ塔）から東北方向へ成田方面に至る溝状の道が残り、牛道と呼ばれていることから、実際には針生、成田、川田の順だった可能性がある。

④6 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター編『古館遺跡―本文編―』（栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団、一九九五年）一四一―一七頁。

④7 次の文献は古道と牛の伝説の検討から「ウシ」が幹線道路と関係することに言及している。坂井 隆「『あずま道』、上野のポスト東山道」（藤原良章編『中世のみちを探る』高志書院、二〇〇四年）一五―一三六頁。なお、古道にまつわる牛の伝説は、貴人やその荷物の運搬手段としての牛に焦点をあてて語られる場合が多いが、「ウシ」とは「大人（ウシ）」であって「土地を領有する人や事物を主宰する人を尊敬するという語」（『日本国語大辞典』）の意味があることに注意しておく必要がある。

④8 実際には、稲村は鎌倉期に岩瀬郡を治めた二階堂氏の本拠地であり、また観応二（一二五二）年には南朝勢と対峙するために奥州管領の吉良貞家が拠点とした地である。これらは、ここで述べた道路網を前提としたものと考えられる。

④9 『白河風土記』巻之十二「表町」。

⑤0 福島県歴史資料館所蔵の、明治一五年以前の小字図『岩代国岩瀬郡岩瀬村字日光下』（整理番号29）、明治一六年以前の小字図『岩代国岩瀬郡久米石村字西借宿』、明治一六年の『岩代国岩瀬郡久米石村全図』（以上、整理番号 岩瀬4）など。

⑤1 『相生集』巻之第八稿「北杉田 虎丸長者宅址」（翻刻 前掲④5）。

⑤2 a 二本松市教育委員会編『ふるさとの伝え語り』二本松市教育委員会、一九七六年、一一頁。b 二本松市編『二本松市史 第八巻 各論編1』二本松市、一九八六年、五九六―五九九頁。

⑤3 明治一六年の『岩代国安達郡北杉田村全図』（福島県歴史資料館蔵。整理番号 安達17）によれば、当時の杉田川の河道は小字長者宮付近では現在よりも南の丘陵端直下を流れていた。

⑤4 a 二本松市編『二本松市史 第三巻 資料編1』二本松市、一九八一年、四七―七頁。b 同編『二本松市史 第一巻 通史編1』二本松市、一九九九年、一八八―一九〇頁。c 二本松市教育委員会編『郡山台Ⅱ』二本松市教育委員会、一九七八年。d 同編『郡山台Ⅲ』二本松市教育委員会、一九七九年。

⑤5 a 前掲⑤4 a。b 前掲⑤4 b（一九〇―一九一頁）。c 二本松市教育委員会編『郡山台Ⅳ』二本松市教育委員会、一九八〇年。d 同編『郡山台Ⅴ』二本松市教育委員会、一九八二年。

⑤6 福島県教育委員会編『歴史の道』調査報告書 奥州道中 白坂境 明神―貝田 福島県教育委員会、一九八三年、六三―六六頁。

⑤7 『続日本後紀』承和一〇年一月二六日条。

⑤8 二本松市編『二本松市史 第九巻 各論編2』二本松市、一九八九年、四一―四一七頁。

⑤9 前掲⑤4 b（二五七頁）。

⑥0 『相生集』巻之第八稿「塩沢 殿地岡館、同「塩沢 古称念寺」（翻刻 前掲④5）。

⑥1 『相生集』巻之第二十稿「古官道」（翻刻 二本松市編『相生集下』二本松市、二〇〇五年）。前掲⑤6もこれと同様のルートを近世以前の古道とする。なお、地元でも、小字下町付近からはほ山裾を通過って舟形石集落に至る道はかつて「奥州街道」であったと伝えられている。

⑥2 『相生集』巻之第四稿「北杉田」、同巻之第八稿「北杉田 関址」（翻刻 前掲④5）。前掲⑤3の地図には舟形石集落の東北に小字関がある。

⑥3 『相生集』巻之第十二稿「北杉田 善応寺」(翻刻 前掲⑥)。

⑥4 桑原兵次『古代中世杉田村の文化』杉田郷土研究会、一九五九年、三二—三三頁。

第三章 東北地方の「カリヤド」からみえる道と

渡河

これまでの検討によって、東北地方のカリヤドという地名について、次の点が明らかになった。⑦名取仮宿は谷底平野に舌状に突き出た微高地にある奥大道の渡河点であること、⑧白河借宿は谷底平野に舌状に突き出た河岸段丘上にある古代東山道や奥大道の阿武隈川渡河点であること、⑨鏡石借宿は舌状に突き出た段丘およびその地先にある東西および南北を貫く中世の幹線道路の渡河点であること、⑩二本松借宿は谷底平野に面する丘陵端にある水陸交通の結節点に近く古代から中世の幹線道路の渡河点であった可能性が高いこと。つまり、これら四箇所の「カリヤド」はいずれも河川に面し、河川に突き出た台地端や丘陵端に位置して、とくに中世の幹線道路が通過し、その渡河点であることがわかった。このような東北地方におけるカリヤドという地名の特徴と機能は、関東地方における検討結果と一致する。

関東地方では、カリヤドという地名を通過する幹線道路は鎌倉

街道である場合が目立ったが、東北地方ではそれは奥大道であった。名取仮宿は、「東街道」と伝えられる古道が通過し、奥大道と推定される王ノ壇遺跡の道路跡までたどることができる。また、白河借宿は、白河郡衙跡の対岸にあつて古代東山道が通過していたとみられるが、周辺の中世の遺跡や伝承などからみてその後も道が存在していた可能性が高く、奥大道と推定される芳野遺跡の道路跡との接続を考慮するならば、その道は奥大道とみることができる。さらに、鏡石借宿は、奥大道と推定される荒井猫田遺跡の道路跡から篠川・稲村両御所へ続くルートの延長線上にある。二本松借宿については、現段階では奥大道に結びつく直接の資料はないが、安達郡衙跡の隣接地でかつ周辺の地理的条件などから奥大道が通過していたとみられる。このように、ここで検討したのは四箇所にすぎないが、それらを起点とすることで線としての奥大道が浮かび上がってきたことも本稿の成果である。

文治五（一一八九）年、奥州合戦に際して進軍した三ルートのうち、源頼朝は大手軍を指揮して鎌倉街道中道から白河関を越えて奥大道を北に攻め上った^①。この事実は、鎌倉街道中道とそれに接続する奥大道が、鎌倉から奥州に至るメインルートであったことを端的に物語る。そのルート上には前稿で検討した川崎苜宿があるが、関東地方と東北地方のカリヤドという地名が、ともに連

浪江町の苜宿は、関東地方から東北地方へ至るもう一つの古代・中世の奥州縦貫道路である東海道が通過していた可能性がある。そこは、請戸川左岸の河岸段丘上にあつて、これまで述べてきたような自然条件を備えた渡河点である(図10)。また、標葉六騎七人衆の一角をなす苜宿氏の苗字の地であり、同氏が神官を務める標葉神社も立地する。奥州合戦において、千葉常胤や八田知家が率いた東海道軍の進軍ルートはこれであつたかもしれない。

また、福島県石川町の借宿は、前述した稲村御所あるいは鏡石借宿から太平洋に抜けるルート上にあるが、これはおおむね御斎所街道に重なる。詳しくみると、現石川町市街の東郊で今出川と

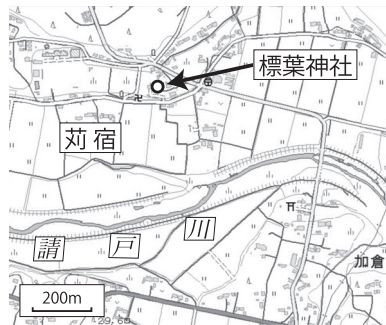


図10 浪江町の苜宿

ベースマップは国土地理院の電子地形図25000。

つづる道に立地している点に注意してほしい。

さて、ここで、福島県・宮城県にありながらこれまで検討してこなかった三箇所のカリヤドという地名について簡単にみておこう。福島県

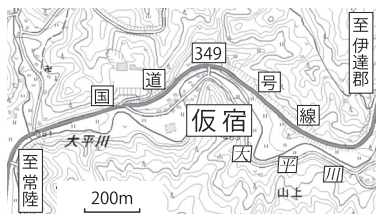


図12 古殿町の仮宿

ベースマップは国土地理院の電子地形図25000。

とところで、石川借宿付近の御斎所街道は、近世では飛鳥川右岸を走っているが、左岸の山麓には飛鳥川に沿つて下流から、借宿に一基、小原に二基(文和三(一三五四)年銘の板碑を含む)、古市場に十四基(康暦三(一

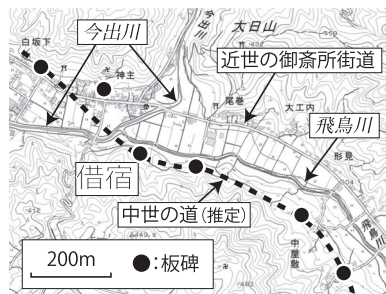


図11 石川町の借宿

ベースマップは国土地理院の電子地形図25000。

飛鳥川が合流する付近にあり、地形的には飛鳥川あるいは合流後の今出川左岸すぐの山麓に位置する(図11)。しかも、対岸では、そこに向かって舌状に微高地が張り出しているため、そのあいだにはさまれた低地の幅は五十メートル前後にすぎない。

三八一）年銘、康応二（一三九〇）年銘の板碑を含む）、中屋敷に一基の板碑が線状に連なっていることから、中世には左岸に道が通っていたと考えられる。とすれば、借宿より下流部では白板に一基、普門寺に二基の板碑が右岸にあるので、借宿付近に渡河点があつた可能性が高い。

さらに、福島県古殿町の仮宿は、同町内で御齋所街道と交差する国道三四九号線を約五キロメートル北上したところの旧道に沿つて位置している。ここもまた尾根の末端にあり、谷底を蛇行して流れる大平川の渡河点にあたる（図12）。現在では国道三四九号線と称されるこの道は、阿武隈高地を南北に貫く幹線道路であり、ここから南へ行けば常陸や磐城、北へ向かえば阿武隈高地北端に近い伊達郡に至る。そこは伊達氏の本拠地であり、その阿武隈川対岸には奥州合戦の戦場となつた厚樫山がそびえる。

ところで、すでに本稿では、東北地方のカリヤドという地名が、関東地方における鎌倉街道と同様に、奥大道に関わることを指摘した。しかし、いまここでみたように、浪江菟宿、石川借宿、古殿仮宿では奥大道に関連していない。つまり、これは関東地方でも同様であるのだが、カリヤドという地名は、必ずしも鎌倉街道や奥大道のような特定の幹線道路だけにみられるものではない。そのような特筆される幹線道路ほどではないが、それに準じて、

地域間を結ぶ幹線とみなしうる道にも、その特徴と機能をとまないつつ立地している点に注意しておかなければならない。

さて、本稿の目的は、カリヤドという地名について帰納法的に論じるために、東北地方を対象地域として、現地に即して検討した事例を積み重ねることにあつた。その点では、以上でその目的は達成したことになる。今後は、もう一つの主たる分布域である東海・甲信地方を対象地域として検討することが課題となる。しかし、これまでの検討事例を踏まえて、カリヤドという地名に関してひとまず作業仮説を得ておくことは、今後の道標にもなることから、最後に現時点における予察を加えておきたい。

道を通行する人々にとって河川はときとして難所になつた。普段は、橋、船橋、船、徒歩で渡つたが、日本に特有の季節的な大雨や融雪などによる河川の増水、さらには暴風雨などの悪天候ともなれば、危険がともなう。もちろん、このなかでは橋は比較的安定しているが、鎌倉などの都市内部やその周辺は別として、東国の幹線道路にかぎれば、天竜川、相模川、鶴見川、高野川（古利根川）などに架橋の事例はあるものの、全体としてみるとそれはさほど多くはあるまい。また、船橋も墨俣川や富士川などに確認できるが、それでも状況によっては水勢を避けるために船を繫いだ綱を切り落とすこともあつた。しかも、いずれも耐用年数や

維持する負担を考えれば、常時通行が可能だったとは想定しにくい。船と徒歩であれば、渡河不能の場合はさらに多かつたにちがいない。そのため、河畔での一時的な滞留を余儀なくされる。それは数時間のことであれば、数日以上におよぶこともあった。

このような状況で、通常の宿が近くにないかそれを利用できない場合などには、渡河できるようなまで雨風をしのぎ、あるいは休息をとれるような応急の施設が必要とされる。前稿で引いた『更級日記』でも、体調を崩した作者が天竜川の畔に設けてあった仮屋で休養をとるためにしばらく留まっている。時代はさかのほるが、承和二（八三五）年、渡船のあった美濃・尾張国境の墨俣川兩岸に、渡河に窮した調庸物の運脚夫のために布施屋が設置され、^⑦久安六（一一五〇）年には「旅人の仮の布施屋は風寒み柴折りくべて明かしつるかな」^⑧と、旅人が一時的に布施屋で夜を越す様子が詠まれている。これまで検討してきた渡河点に立地するカリヤドとは、このような系譜を引くものとして、ひとまず考えることはできないであろうか。この場合、カリヤドを「一時的」すなわち「仮」または「借」の、難を通れるための「滞留施設」すなわち「宿」と考えることになる。これはまた、湊や渡し場にみられるタンガという地名のもととなった且過寮や、往來の僧尼などに便益を与える接待所にも一脈通じることになる。

以上を踏まえてこれまで検討した事例をみると、道が渡る河川の規模に注意しなければならないことに気づく。多くの場合、それは中規模以上の河川であり、川幅と水量などからみて、渡河が困難になる場合もあったと考えられる。具体的には、本稿で検討した阿武隈川（白河借宿）、釈迦堂川（鏡石借宿）、杉田川（二本松借宿）、請戸川（浪江苜宿）、前稿で検討した多摩川（川崎宿）、越辺川（鳩山仮宿）、平井川（日の出狩宿）、旧広瀬川（伊勢崎仮宿）、渡良瀬川（足利借宿）がそれにあたる。現在のところ、これらの地点に橋や船橋が古代中世に架けられていたという記録はみあたらない。とすれば、一時的に滞留せざるをえない場合があって、カリヤドの成立する条件があったとみてよい。なお、今出川・飛鳥川（石川借宿）、大平川（古殿仮宿）もこれらに準じて考えられるかもしれないが、現段階では保留しておく。

一方、残りの一事例である岩沢川（名取仮宿）は小河川であり、川幅もさほど広くはない。このような小河川は、関東地方の未検討事例のなかにもみられる。それらが渡河不能になることがあって、前述のようなカリヤド成立の条件を備えていたか否かについては、それぞれの個別事情によるところが大きい。たとえば、岩沢川については、その谷底平野は泥炭質の低湿地であって、松尾芭蕉が実方の墓を訪ねようとして悪路のために果たせず「笠島は

いづこ五月のぬかり道」（『おくのほそ道』）と詠んだように、降雨によって通行が困難になった可能性がある。

しかし、渡河不能となることがほとんどない小河川であっても、あるいはそれが小河川でなくても、「カリヤド」の特徴や機能の類似性から、派生的にその呼称が生じる場合を想定しておくことは、事例蓄積の現段階では許されるだろう。これによって、渡河点にかぎらず交通の要衝や難所などに立地していた布施屋、接待所、タンガ、マルコとの比較の間口を広げておきたい。

① 『吾妻鏡』 文治五年七月一七日条、一九日条、二五日条、二八日条、二九日条、八月七日条など。

② 康永二（一三四三）年の仲禅寺十一面観音座像胎内銘には「借宿六郎」の名がみえる（翻刻 浪江町史編集委員会編『浪江町史』浪江町

教育委員会、一九七四年、一一一―一一五頁）。

③ 浪江町史編集委員会編『浪江町史』浪江町教育委員会、一九七四年、四一四―四一九頁。

④ 石川町板碑編さん委員会編『石川町の板碑』石川町中央公民館、一九七九年、四―六番、一七―三〇番、三九番。

⑤ 福島県教育委員会編『御斎所街道』福島県教育委員会、一九八五年、三五頁。

⑥ 前掲④（一―三番）。

⑦ 『類聚三代格』卷一六「太政官符（応造浮橋布施屋并置渡船事 和二年六月二十九日）」。

⑧ 『群書類従』卷第一六九「久安六年御百首」。

⑨ 相田二郎「中世の接待所」（同『中世の関所』吉川弘文館、一九八三年復刻）三六四―四〇〇頁（初出は、歴史地理六九―二、一九三六年）。

（国立歴史民俗博物館教授）

The Place Name *Kariyado* in the Tōhoku Region of Japan:
Roads and River Crossings in Medieval Times

by

AOYAMA Hiro'o

Place names are given to locations after people have recognized their distinctive characteristics based on such factors as natural features, social functions and historical background of the locations. Place names, therefore, can serve as excellent historical source materials. In order to confirm their value as reliable sources for historical studies, it is indispensable to conduct empirical studies of such place names. With this in mind, this article seeks to reach a general understanding of place names by taking an inductive approach, examining a specific place name that is found in multiple locations in Japan and considering the characteristics of each site and then comparing them.

Specifically, this article focuses on the place name *Kariyado*. This name was examined in a previous article (Aoyama, 2018), which confirmed that the name is found mainly in central and northern Japan, i.e., ranging from the Tōkai and Kantō-Kōshin regions up to the southern Tōhoku region. The article focused on five cases in the Kantō region: Kawasaki City (in Kanagawa Prefecture), Hatoyama Town (in Saitama Prefecture), Hinode Town (in Tokyo), Isesaki City (in Gunma Prefecture) and Ashikaga City (in Tochigi Prefecture). The case study determined that the place name *Kariyado* is: (1) found in places along rivers and in relatively stable conditions; and (2) found along medieval highways, particularly at river crossings on the Kamakura Kaidō, which starts in Kamakura, the capital of the Kamakura Shogunate, and from which several highways heading in various directions originate. Based on those findings, this article focuses on the Tōhoku region, which is one of the major distribution ranges of this place name, and examines in detail places named *Kariyado* in the following four locations: Natori City (in Miyagi Prefecture), Shirakawa City, Kagamiishi Town and Nihonmatsu City (all in Fukushima Prefecture).

The findings were as follows. *Kariyado* in Natori City is located at a slightly elevated point that protrudes in a tongue shape into a small valley

bottom plain. The point is located where Oku-no-Daidō, a major highway that ran through the Tōhoku region from north to south in medieval times, crosses Iwasawagawa river. Kariyado in Shirakawa City is located in a fluvial terrace that protrudes in a tongue shape into the valley bottom plain along Abukumagawa river. It is the point where the ancient Tōsandō highway and Oku-no-Daidō highway crossed the Abukumagawa river. Kariyado in Kagamiishi Town is located on a tongue-shaped protruding terrace along Shakadōgawa river and beyond. It is also a point where Oku-no-Daidō, a highway running north to south, and an east-to-west highway crossed one other and was also a crossing of the Shakadōgawa river. Kariyado in Nihonmatsu City is located near the confluence of the Abukumagawa and Sugitagawa rivers. It lies at the edge of a hill facing the valley bottom plain along the Sugitagawa, close to the juncture of land and water traffic routes and was very likely a point where the highway crossed the river.

Thus, all four of the above-mentioned locations named Kariyado are located at the edge of a hill or plateau protruding into a river. These places are where medieval highways passed through and points where these highways crossed rivers. The characteristics and functions of places named Kariyado in the Tōhoku region correspond to the results obtained in the previous article that focused on the Kantō region.

In the Kantō region, it is evident the place name Kariyado has a relationship with the Kamakura Kaidō. This article has determined that in the Tōhoku region, too, this name has a relationship with the Oku-no-Daidō, which is an extension of the Kamakura Kaidō into the Tōhoku region. Yet, not all places named Kariyado are along the Oku-no-Daidō. Although they are not discussed in detail due to space restrictions, Kariyado in Namie Town, Ishikawa Town and Furudono Town (all in Fukushima Prefecture) are not located along the Oku-no-Daidō. These places, however, are along important roads in their regions and also at river crossing points. These findings indicate that places with the place name Kariyado are found not only along extensive national-level highways, such as the Oku-no-Daidō, but also similarly important regional highways and have specific characteristics and functions.

Key Words; Words; place name, road, river crossing, travel, Oku-no-Daidō